



04年 マイワシ

単位：数量，1,000トン、価格，円/kg

年	漁獲	産地	輸 出		消費地		在 庫	加 工 品 生 産				輸 入		消費支出 生(円)	
			生冷	缶	生	塩干		缶	身	油脂	煮干	塩干	ミ-ル		生・冷
15	5.2	37.6	1.5	0.2	17.9	13.1	30.1			32.5	28.8	383	38.8	1,010	
16	5.1	27.9	2.2	0.1	19.5	12.5	21.3					398	30.5	1,012	
%	98	74	149	73	109	95	71	####	####	####	0	0	104	78	100

年	産地	輸 入				輸 出		消費地		消費支出 生(円)	海域	15年	16年	対比(%)
		ミ-ル	生冷	生冷	缶	生	塩干	生(円)						
15	168	74	79	81	522	386	814	892	道東	0	0	####		
16	181	76	77	86	571	364	887	836	三陸	9	2	25		
%	108	103	97	106	109	94	109	94	常磐	19	21	109		
									九州	0	0	87		
									山陰	0	0	####		
									その	8	4	54		

MAX S63年、4488千トン

漁獲量と資源

16年のマイワシの漁獲量は、5.1万トンと前年の5.2万トンをやや下回り、近年でも最低の水準を更新し1970年代初頭の5万トン台の低水準であった時代の数量と推定される。

道東漁場では、引続きマイワシの漁獲は皆無でカタクチイワシが5.4万トンで前年(約4.6万トン)を上回った。北部太平洋海域では常磐では前年並みであったが、三陸では南下期の秋～冬にかけてややまとまった漁獲をみた程度で悪かった前年に比べ更に悪かった。また、近年漁獲の急減をみている山陰では、本年も漁獲が皆無であった。

太平洋系群のマイワシ資源は1981年に1,500万トンを超え、1988年まで1,400万～1,900万トンと高水準で安定していたが、1989年から急減し、1994年には88万トンとなった。1995～1999年は50万～60万トン台で推移したが、2000年から再び減少傾向となり、2002年以降11万トン台と推定される。なお、2004年も11.3万トンと予測される。2001～2003年の加入量が連続して低水準であったことから、2004年においても資源量、親魚量が減少傾向にあるものと推察されている。

1989年以降の資源量は急減していて、その後も減少傾向が続き、1997年以降は極端に減少し、2002年級群の資源量は過去最低となっている。

対馬暖流系群の資源量もは1989年以降、急激に減少し続けている。1989～1994年の資源量は100万トン以上であると計算されたが、1995年以降は100万トンを下回り、1997年以降は10万トン以下、2001～2003年には1万トン以下になった。卵稚仔調査において、2001年には卵がほとんど採集されなかった。2002～2003年には少量の卵が採集されたが、産卵の水準は依然として極めて低位にある。2001～2003年には沿岸域で操業する中型まき網のCPUEも極めて低調であった。

産地水揚量と価格

16年の水揚量は、2.8万トンで前年(3.8万トン)をかなり下回った。こうした低調な漁模様を反映して価格は、181円で前年(168円)をやや上回った。

本年は、北部太平洋海域の三陸で秋口に常磐で夏場にかけてややまとまった漁獲がみられたのみで、前年同様凶漁に終わった。

市況は181円で前年(168円)をやや上回り依然高水準を維持した。

なお、本年のミール相場も、年明けの10万円から始まり年末まで続いた。したがって2年連続市況変動はなく、本年も前年同様周年を通じて比較的堅調相場を保ったことになる。

三 陸

16年の三陸での漁況は、初漁期（北上期）の4、5月は昨年同様低調で皆無、夏場にかけても漁獲はほぼ皆無であった。

三陸(単位:1000トン)		常磐(単位:1000トン)		山陰(単位:1000トン)		日本海北(単位:1000トン)		
月	15年	16年	15年	16年	15年	16年	15年	16年
1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
4	0.0	0.0	0.3	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0
5	0.2	0.0	0.7	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0
6	0.1	0.1	1.7	2.7	0.0	0.0	0.0	0.0
7	0.1	0.0	3.8	4.2	0.0	0.0	0.0	0.0
8	4.9	0.0	8.5	3.6	0.0	0.0	0.0	0.0
9	2.3	0.2	1.5	1.8	0.0	0.0	0.0	0.0
10	0.5	0.8	0.3	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0
11	0.9	0.4	1.0	2.3	0.0	0.0	0.0	0.0
12	0.1	0.8	1.4	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0
計	9.1	2.3	19.1	20.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	MAX S61年1097千トン		MAX S58年822千トン		MAX H元年713千トン		MAX	

秋から冬場の南下期は昨年同様低調さであったが、この海域では唯一この時期にややまとまった。

魚体は、周年を通じて2003年級群主体に漁獲された。

常 磐

16年の常磐での漁況は、初漁期は前年同様皆無、その後の北上期も前年以上に低調で7月にややまとまり昨年を上回ったのみであった。ただ、後半の南下期は昨年をやや上回る漁獲がみられ、来年に期待をつないだ。

魚体は、初漁期から夏場の北上期は2003年級群主体、そして漁期後半の南下期は2003年級群主体に一部2002年級群の出現もあった。

山 陰

16年の山陰での漁況は、混獲でみられる以外は昨年同様周年皆無状態が続いた。

また本年も上半期3～6月にカタクチイワシのまとまった漁獲がみられたが、前年を大きく下回った。

在 庫 量

本年の平均在庫量は、上半期から少なく2万トン前後の在庫を反映した結果2.1万トンで前年(3万トン)をかなり下回った。これは、特に上半期から国内生産が少なかったことと、輸入量も上半期は前年をかなり下回った事などによるものである。越年在庫は2万トンで前年(2.5万トン)を大き

く下回るスタートとなった。

輸 出 入

本年の輸入ミールは、39.8万トンで前年（38.3万トン）をやや上回った。

輸入ミールはマイワシを始めとした餌向け魚種の国内漁獲量の減少と為替円高もあり年々増加基調を辿っていた。しかし南米におけるミール生産の減産、近年の円安傾向も重なり一時ほどの増加傾向は見られなくなっていた。しかし、この2002,2001年間は40万トン台に輸入量も回復しつつあったが、本年は2年続きの30万トン台の後半で終わった。

また、平成7年頃から餌料不足による外国(米国、メキシコ)からの原魚輸入もみられている。現在では、依然この両国が主体で（夫々21,807トン、5,888トン）ある缶詰主体に鮮魚向けにも恒常的に利用・販売されている。また、その他南アフリカ、カナダ等からも輸入されているが、本年は中国からの輸入は大きく減少している。また続く国内漁獲の不振を受けてしたがって本年は、3万トンで前年（3.9万トン）を引続きかなり上回った。

輸出は缶詰と冷凍に分かれるが、缶詰輸出は、サバ缶同様減少の一途を辿っており、本年は更に少なくなり0.1千トンで前年（0.2千トン）を更に大きく下回り、近年の最低を今年も更新した。

また、冷凍輸出は国内漁獲が引続き低水準であったことを反映し2.2千トンと少なかったが、前年(1.5千トン)よりは多かった。

価格は、缶詰が571円で前年（522円）をかなり上回り、冷凍は86円で前年（81円）を下回った。

消費地入荷量と価格

本年の10大都市の入荷量は、2万トンで前年（1.8万トン）をやや上回ったが、依然低水準にとどまっている。

マイワシは近年の産地漁獲量も最低の水準まで落ち込んでいることから、消費地でのマイワシの入荷も減少傾向にあるが、本年は止まった格好になった。しかし上述のように本年も輸入イワシや解凍イワシの入荷が恒常的にみられた。

価格は、364円で前年（386円）をやや下回ったものの、これは若干入荷が多かったことによるものである。家計消費でも数量、金額とも前年並みかやや減少がみられており家庭内需要の落ちこみも止まった。

塩干は、1.3万トンで前年（1.3万トン）をやや下回った。